第五十七回写真道展に向けて

審査委員長
田村健太朗

「写真道展」は今回で五十七回を迎えることとなりました。この長い歴史と伝統のある写真道展の審査委員長を仰せつかり、その重責を果たせるよう努めたいと思っております。

写真はその時代を反映する証でもあり、時代の表情、世相に敏感でなければなりません。会員の皆さんにはその意識を大切に活動されることを願うものであります。また、「北海道は写真の天国」（林忠彦談）とも言われております。北海道の自然と風土こそ我々の被写体、その被写体をしっかりと見据え、意識を新たにして作品作りに取組む姿勢で頑張られることを願っております。

私達は、たとえアマチュアカメラマンであっても、単なるコンテスト屋で終わるのではなく、写真作家としての意識と自負をもつての活動が大切なのではないでしょうか、そのことが北海道写真協会規約の目的である「北海道写真文化の向上発展と会員相互の親睦を図ることを目的とする」に繋がることになるのではないかと思います。

応募作品については、前回同様各部とも単写真であり、カラー、モノクロを問いません。またデジタル作品も応募可となっておりますが、第一部「自由」では二次的画像加工は可となっておりますが、第二部「観光・産業」と第三部「ネイチャーフォト」は題材の趣旨から内容に作りがあってはならないので、二次的画像加工は不可となっておりますので、充分注意してください。

求められている視点

「写真道展」に求められている視点をまとめてみますと①新しい素材の発掘　②表現の新鮮さ　③主題の明確さ　④北海道ならではの作品　⑤ローカル色のある作品　⑥冬や雪の作品　⑦独自性のある作品などがあげられます。なお、応募に当たって過去の道展作品との類似、及び二重応募にならないように、また、応募部門を間違うことのないように配慮してください。毎回問題になり検討することが多いのです。

「第五十七回写真道展」応募に参加くださる皆様のご健闘と多数の応募を期待しております。

〈経歴〉第五十三回写真道展審査委員長
写真集「オホーツク」他　写真展　東京、札幌、旭川、東神楽などで数回開催

期待する写真

●第一部

一写入魂

■吉江　和幸

第二部と第三部はテーマ部門でそれぞれのテーマに合った作品創りをするのですが、第一部は自由のため本人独自の感性・表現力が要求されます。審査員からのアドバイスと言われても大変むずかしいことです。創作は、作者本人の感性から生まれるものであり、自身の心の叫びであると思います。私も皆様と同じ写真を愛する仲間の一人として私自身の写真に対する思いを申しあげます。

毎回作品を拝見して思うことは、作者自身の創作意欲が感じられない作品が多い、即ち、作品の中味が見えない、作者不在の写真が最近特に見受けられます。また、類似作品の多いのも否定できません。参加することに意義あり型で応募し結果が出ればそれで良し、と言ったゲーム感覚で出品される方も多いようです。ただ参加するからには入賞したい気持ちは誰でもあるでしょう。しかし、本人が理解できない作品で結果を出しても本当に嬉しいのでしょうか・・?作品の上手下手より作者自身の熱き想いを感じていただいた方が真の喜びではないでしょうか。

また、デジカメで作画されている方々のお話を窺うと数時間で数千カット撮ったなどと自慢する方がおります。私が「そんなに感動場面があったのですか・・?」と聞くと「沢山シャッターを切っておけば一枚ぐらいものになればラッキー」と言う返事に私は複雑な気持ちになりました。

そんな方々にこの言葉を送りたい「一写入魂」今でも私が大事にしている言葉があります。四十数年前、私の恩師である加賀俊男先生（元写真道展審査員）から「作品は心で撮るんだ、そこにドラマがあるから」の二言が今でも私の心中に響き渡っています。人生一生がドラマ、写真は一瞬のドラマです。名誉ある写真道展入賞めざして熱き想いの一枚をお待ちいたしております。

●第二部

仕上げに気づかい

■西野　徳義

第二部観光・産業の部に応募される方々に、少しでもアドバイスになり、更には私の期待する作品の片鱗でも伝わっていただければと思うところです。

道展の第二部の応募作品については、他の部門と同様、作品の仕上げには精一杯の気づかいが求められます。銀塩であれ、デジタルであれ仕上げの粗雑な作品は内容に見るべきものがあっても篩にかけられることがあります。観光・産業の部は、一部や三部との比較するとそのカテゴリーは明確なので、被写体をイメージし易いのではないかと思います。応募される方は、応募規定をよく遵守して、求められているテーマから悦脱することのないようにすることは基本中の基本だと思います。現下の不況や政権交代等の中で、道内のインフラ整備や公共事業、観光産業等に先の見えない状況にありますが、こういう時だからこそ見えて来るものがあるかも知れません。撮影の事前のコンセプトが大切になってくる